

简 讯

- ◇招生宣传：10月间“中心”派遣两个小组到东北和西南进行了招生宣传。池田 温主任教授、陈海良副主任、日向茂男老师3人于10月16日至23日，在哈尔滨、长春、沈阳、大连4大城市的7所大学进行了招生宣传、学术讲演等活动。办公室工作人员李宝顺、宁民治于10月12日至30日去了成都、重庆、武汉，拜访了当地省、市的教委、招生办公室，在9所大学进行了宣传，在2所大学召开了应届毕业生座谈会，还向部分“中心”毕业生介绍了“中心”的近况，听取了他们的希望与要求。
- ◇10月31日（六）14:00 “中心”在接待室举行了研究生、教师（助教）进修班、客座研究员的报考情况说明会，在京的各大高校的师生参加了说明会。
- ◇六期生的论文答辩定于12月14日~16日间进行。全体六期生（共17名）将参加答辩。届时将有秋山 虔（东京大学名誉教授）、大久保典夫（创价大学文学教授）、北原保雄（筑波大学文艺语言学部长）、十时严周（庆应大学名誉教授）、富永健一（庆应大学环境情报学部教授）、平石直昭（东京大学教授）、平冈敏夫（群馬县立女子大学学长）、源 了圆（元国际基督教大学教授）前来参加答辩工作。
- ◇公开讲座：10月15日、22日、29日、11月5日、12日（各周四），专家们按惯例举行了公开讲座，获得了好评。讲演者以及讲题如下：吉田公平「日本的阳明学」、十川信介「近代小说中描写的餐桌」、平川 祐弘「『自助论』—明治日本工业化的国民教科书」、日高昭二「昭和文学的空间」、石井 明「第二次世界大战后的日苏关系」。
- ◇专题讲座：10月16日（五）、23日（五）“中心”李书成教授、周维宏讲师分别作了题为「明清时期的中国日本学研究」、「日本农村工业化研究」的报告。11月6日（五）、13日（五）客座教授王家骅就「日本儒学的特质与日本文化」、「儒家思想与日本的现代化」作了专题报告。
- ◇11月14日（六）“中心”组织专家到香山赏红叶，同时参观了曹雪芹故居、植物园碧云寺等名胜。

◆ 1993年（上期）客座研究员招聘细则 ◆

- 对 象：已取得硕士学位或具有讲师以上资历的德才兼备的日本学研究者，年龄在40岁以下（1953年3月1日以后出生者）。
- 研究方向：日本语言、日本文学、日本社会、日本文化。
- 任 务：按确定专题进行研究；研修期满后提交研究论文；协助中日专家作适当的教学辅导工作；协助“中心”作适当工作。
- 期 限：半年或一年。 名 额：每年10名。
- 待 遇：由本“中心”提供生活及研究费用。

※申请截止日期为1992年12月15日（以当日邮戳为准）。

提到石经，首先想到的是西安的碑林和曲阜孔府的碑刻。至于云居寺里保存着石经的事，我已经记不清是什么时候听人说的。到北京不久，先来的大阪市立大学的三浦国雄先生约我前去参观，结果由于与平凡社的岸本武司先生的时间没有调整好，未能成行。十月中旬，爱和晋平（女儿和儿子）来北京旅游时，在近畿旅行社藤本善一先生的安排下，与在北京大学留学的柴田清继先生一家、井上优老师一起在参观了周口店后，越过风景秀丽的山地，来到了云居寺，目睹石经时的激动心情是难以名状的。因为我从心里感受到了佛徒们躲避水、火的灾难以及对佛教的镇压、力求传播佛教的热情。这次又能和日本学研究中心的老师一同前来，令我又有一番新的感受，就象饭团和饺子的味道一样，成了不能忘怀的朴素的回忆。途中也相当愉快，一边欣赏着窗外别具一格的风景，一边与热闹的同伴们畅所欲言。这次的云居寺旅游成了我北京生活的最有特色的一个假日。下次再去的时候，大概修复工作也已经结束，浓妆艳抹的云居寺一定会招来许多观光者。应该说我们去的正是时候。

※吉田公平老师是广岛大学文学部教授，从事中国近代思想史的研究，今年8月27日至11月28日在“中心”任教，担任「日中比较文化特别研究」课程。

☆我的北京生活☆

平川 节子

我的北京生活是从在颐和园一边吃蝎子一边欣赏中秋明月开始，在寒风凛冽的严冬即将到来时的东来顺的涮羊肉以及汾酒的干杯声中结束的。胃部相当充实，社交方面也收益不小。作为一个日本学生，能够与为数不多的各个专业的老师们进行交往，实在是件令人庆幸的事。外国人专家集中在友谊宾馆这样一个饭店式住宅区里，而且只能在规定的时间内用餐，这为我们这个小小的学术团体的活动创造了有利条件。就连旅游的时候，导游们各色各样，使我每到一处都能有新的收获。还有，国庆节旅游时，陈海良先生对我的中国话的理解率每天都有所增长，令我不能忘怀。与日本学研究中心的学生一起到北京郊外去旅游，跟北外的学生一起去了好几趟北京图书馆，让他们吃了许多苦头，不过这些都成了我北京生活的美好的回忆。

在北京，推人、扒拉人都不为失礼，到我终于能身体力行地做到这一点时，却要回国了。给大家添了不少麻烦，不胜感激。

※平川节子为平川佑弘祐弘的长女，芳龄26，东京大学的博士生，专攻美国文学。这次是随其父来京的，已于本月初回国。

通知：为了不断改进“中心”的工作，10月间开始了有关科研、教学、毕业生去向的调查活动，希望广大毕业生能够积极合作，认真填写调查表，并请于12月10日前寄回。

〔通信・日本語版〕 ニュース

- ◇学生募集宣伝：10月中、本学派遣の2つのグループが、中国東北と西南地区において学生募集のための宣伝活動を行った。まず池田温主任教授、陳海良副主任、日向茂男教授の3人は、10月16日より23日までハルビン、長春、沈陽、大連の4都市7大学で募集宣伝、学術講演等の活動を行った。一方辦公室職員である李宝順、寧民治の両氏は、10月12日から30日までの間、成都、重慶、武漢に赴き、当地の省・市の教育委員会、学生募集事務室を訪問し、9つの大学で宣伝を行い、2つの大学で今期卒業する学生との座談会を開いた。更に本学の卒業生の一部にはセンターの近況を紹介しつつ、希望と要求を聞く場が持たれた。
- ◇10月31日（土）14：00 本学の接待室において大学院生、教師（助教）研修班、客員研究員の受験応募説明会が行われ、在京の各大学の教師学生が説明会に参加した。
- ◇第6期生の論文口頭試問が12月14日から16日の間行われる。6期生全員（17名）が口頭試問を受けることになっている。当該期間には日本から以下の教授陣が口頭試問に参加する。秋山 虔（東京大学名誉教授）、大久保典夫（創価大学文学部教授）、北原保雄（筑波大学文芸言語学部長）、十時巖周（慶應大学名誉教授）、富永健一（慶應大学環境情報学部教授）、平石直昭（東京大学教授）、平岡敏夫（群馬県立女子大学学長）、源 了圓（元国際基督教大学教授）。
- ◇公開講座：10月15日、22日、29日、11月5日、12日の各木曜日、専門家による恒例の公開講座が開催され、好評を博した。講演者と演題は以下の通りである（開催順）。
吉田公平「日本における陽明学」、十川信介「近代小説に描かれた食卓」、平川祐弘「『自助論』－明治日本工業化の国民教科書」、日高昭二「昭和文学の空間」、石井 明「第二次世界大戦後の日ソ関係」
- ◇專題講座：10月16日、10月23日の各金曜日、本学の李書成教授、周維宏講師がそれぞれ「明清時代の中国の日本学研究」、「日本農村の工業化研究」と題する報告を行った。また11月6日、13日の金曜日には王家驊客員教授が「日本儒学の特質と日本文化」「儒家思想と日本の近代化」と題する專題報告を行った。
- ◇11月14日（土）本学の主催により、専門家は香山の紅葉を鑑賞するとともに、曹雪芹の旧居、植物園、碧雲寺などの名勝を参観した。

◆ 1993年（前期）客員研究員招聘細則 ◆

- 対 象：修士の学位を取得したか、或は講師以上の資格経歴と才徳を兼ね備えた日本学研究者。年齢40歳以下（1953年3月1日以後の出生者）
- 研究分野：日本言語、日本文学、日本社会、日本文化
- 任 務：所定のテーマに従っての研究活動；研修期間を全うした後の論文提出；日中教授陣の然るべき教育指導への協力；本学の然るべき業務への協力
- 期 限：半年または一年 定 員：毎年10名
- 待 遇：本学より生活費、研究費を支給

※募集締切期限1992年12月15日（当日消印有効）

石経というと西安の碑林や曲阜の孔府のそれをおもいうかべるが、雲居寺の仏典の石経が保存されていることを耳にしたのがいつのころであったのか、さだかにはおぼえていない。北京に着いてまもなく、さきにきておられた大阪市大の三浦国雄氏に参観を誘われたが平凡社の岸本武司氏との調整がうまくいかず、果せなかった。十月半ばに、あいと晋平が遊びにきたおり、近畿ツーリストの藤本善一氏の計いで、北京大学に留学している柴田清継氏ご一家・井上優氏と、周口店見学の後、絶景の山越えをして、雲居寺詣でをし、石経を目睹した時の感動は格別であった。水火の難、仏教弾圧を越えて仏道を伝えんとする信仰者の熱情を直かに感得できたからである。幸いにも日本学中心の皆さんと再度訪れて一人感激を新たにしえたことは、素朴な食べたおにぎりや餃子の味と共に忘れ得ぬ思い出となった。旅は道中もまたおもしろい。にぎやかな同行者と窓外に異景をながめながら放談に花さかせた道中もまた愉快であった。この度の雲居寺参観の旅はこよなき北京の休日であった。この次に訪れる時には、修復も終って厚化粧をすませ参観者も多いことであろう。我々は好機に訪れたといえよう。

(※吉田公平先生は広島大学文学部教授、中国近代思想史の御専門。本年8月27日より11月28日まで本学で教鞭をとられ、「日中比較文化特殊研究文化」を担当されている。)

☆ 私の北京生活 ☆

平川 節子

私の北京滞在は、中秋の名月の名残を、頤和園で蠍を食べながら愛でることから始まり、冷たい冬の到来を感じさせる空気の中、東来順で涮羊肉を汾酒で盛り上がりながら、つついて終わりました。胃の方も充実していましたが、社交の方はもっと充実してました。各分野の先生が少人数集まって交際する中に混ぜて頂いた日本人学生は幸いでした。外国人專家が友誼賓館というホテル団地に集められていて、食事時間も限定されていたことはこの小アカデミーの活動に大いに貢献したといえましょう。旅行にしてもこんなに各種各方面のガイドがそろっていたので、旅の先々でなにかと楽しく吸収しました。また国慶節の旅行の際に陳海良先生が日増しに私の中国語を理解して下さる率が上がっていかれたのが忘れられません。北京日本学研究中心の学生と共に北京郊外を見物したことや、北外の学生に北京図書館と一緒に何回もいってもらい、苦勞してもらったことも良い思い出です。

人を押しても、かき分けても失礼にならないことを体がマスターしたところで帰国となってしまいました。本当に皆様にはお世話になり、ありがとうございました。

(※平川節子さんは平川祐弘先生の御令嬢で、東京大学博士課程で米文学を専攻されている。このたび平川先生に随行して北京に滞在され、今月の初めに帰国された。)

通知：本学の業務を継続的により良い方向に向わせる為、10月より科学研究、教育活動、卒業生の動向に関する調査活動を開始した。多くの卒業生が積極的に協力し、誠実に調査表に記入されんことを望む。12月10日までに返送されたし。